

拡大するリテラシー

企画者	海保博之(筑波大学) 青山征彦(筑波大学大学院)	山本博樹(大阪学院大学)
司会	茂呂雄二(筑波大学)	
話題提供者	青山征彦(筑波大学大学院) 川浦康至(横浜市立大学)	野島久雄(NTT基礎研究所) 山本博樹(大阪学院大学)
指定討論者	無藤隆(お茶の水女子大学)	高橋登(大阪教育大学)

拡大するリテラシー：企画趣旨

近年の情報メディア環境の進展には目覚ましいものがあります。それにつれて、映像リテラシーやコンピュータリテラシーなど、情報メディアのリテラシーが、新しいリテラシーとして注目されてきました。ここではこうした新しいリテラシーをメディアリテラシーと呼ぶことにします。

他方で、リテラシーを頭の中だけに還元しない新しいリテラシー観も主張されはじめています。こうした新しいリテラシー観によるメディアリテラシーの研究は、従来のリテラシー研究とは異なるパースペクティブを提供できるでしょう。

そこで、本シンポジウムでは、メディアリテラシーの3側面＝「わかる」「つかう」「つくる」(水越, 1994)について、最近の知見を参照しながら新しいリテラシー研究を今後どう進めたいかを議論していきたいと思えます。

わかる：映像の「仕掛け」とリテラシー

青山征彦(筑波大学大学院)

リテラシーには「メディアの伝達内容を、そのメディアの形式に基づいて理解できる」という側面がないだろうか。例えば、映像にはカット技法やクローズ・アップなどの映像技法や、劇映画やニュースのようなジャンルに特有なスタイルがある。そうした「仕掛け」(山本, 1993)がわからなければ、伝えられる内容も適切に理解できないだろう。このように考えると、「仕掛け」を利用できるということは、リテラシーの重要な部分であると考えられる。それにも関わらず、「仕掛け」のようなメディアの形式的な側面は、従来のリテラシー研究では軽視されてきた。

しかし、映像認知研究では、これまでも「仕掛け」を研究の対象に採り上げてきた。そこから示されてきた知見は、従来のリテラシー観とは異なる見方を許すように思われる。例えば、カットを多くすると単純な映像も活動的に感じられる、という知見(e.g. Hochberg & Brooks, 1978)がある。このようなことは、誰かから教えられたわけ

ではないだろう。また、あるシーンが回想シーンかどうかを判断するには、数秒しかかからないことが示されている(青山, 1995)。これも誰かが教えてできるようになったわけではない。仕掛けは意識的に学ばなければならないのかというと、そうとは限らないのではないだろうか。

「仕掛け」の持つこうした性質の説明としては、仕掛けが日常の知覚と対応しているためとする見方(Kraft et al., 1991)や、仕掛けが様々な社会的サポートの中で学ばれているためとする見方(村野井, 1993)があるが、いずれにしても、学校で意識的に教育されるもの、という従来のリテラシー観(いわば「与えられるリテラシー」)とは異なるものを指摘できる。当日は、映像認知研究の立場から、さらにメディアの「仕掛け」とリテラシーの結びつきを考える材料を提供したい。

つかう：ブラックボックスとしてのテクノロジーを使うこと

野島久雄(NTT基礎研究所)

コンピュータ技術の進歩、インタフェースの改善などのおかげで、私たちは複雑なテクノロジーをある程度簡単に使うことができるようになりつつある。現在の技術をもってすれば、どのように複雑な道具であっても、それをあたかも簡単な道具であるかのように見せかけ、素人にも使えるようにすることはできる。これは、技術によって人々にリテラシーを広めたといえる。しかし、これは別の問題も引き起こす。というのは、テクノロジーをブラックボックスの中に入れることにもなるからだ。

コンピュータに対する不安や恐怖を訴える人が多かった10年前と比較すると、コンピュータやワープロ、パソコン通信をごくあたりまえのものとして使いこなす人が増える一方で、テクノロジーそのものに対する不安・不信は逆に拡大しつつあるようにも見える。ここでは、電磁波と健康の問題を例としてとりあげたい。

近年、家電製品、携帯電話、送電線などから出る電磁波が人の健康に悪い影響を及ぼすのではな

いかと考えられるようになった。しかし、この問題に対する電気・物理の専門家と不安に思う人々の間の意識の食い違いは非常に大きい。安全に関して電気のプロフェッショナルの説明のレベルと一般の人々の不安の根拠は全くすれ違っている。

使えるかどうかという基準をもってすれば、たいていの人は電気に関するリテラシーを十分に持っているといえるだろう。それにもかかわらず、電気に対する不安感が生まれつつある。ここで問われているのは、技術を提供するプロの知識のありようと、一般の人の知識のあり方の食い違いであり、そこをつなぐ枠組みがまだ存在していないこと、そして、それが一般の人の電気に対する態度を変えつつあるということなのである。

つかう：WWWにおける「公開」と「編集」のリテラシー

川浦康至(横浜市立大学)

インターネットならではのコミュニケーション様式に、WWW(World Wide Web)によるHome pageがある。1990年CERN(欧州合同原子核研究機関)で開発されたWWWは、ハイパーテキスト型の情報共有形態で、HTML(Hypertext Markup Language)によって構築することができる。またWWWを利用するためのソフトウェア(ブラウザ)として、Netscape Navigatorなどがある。WWWが一般的に知られるようになったのは1994年の春から夏にかけてで(McLaughlin, M.L., 1996)、NCSA MosaicというGUIベースのブラウザとHome pageとを組み合わせた利用がきっかけだった。

それまでコンピュータネットワークでは、電子メール(およびメーリングリスト)、ネットニュース、電子掲示板が主なコミュニケーション様式であった。それらはいずれも線形のコミュニケーションメディアであり、発言することがそこでの中心的な参加形態であった。それに対し、WWW空間に散在するHome pageは、WWWの語源どおり、不特定の匿名ネットサーファーの到来をひたすら待ち受ける、発信と言うよりは「公開」型コミュニケーションの場と言えよう。しかも、ネット上の他の情報資源に適宜リンクを張ることができ、これによって、情報の「編集」はこれまで以上に容易になっている。他者に帰属する情報を引用する必要がないため、従来の著作権に絡む問題も回避できる。印刷物と異なり、制作途上でも情報を公開できる(いわゆるUnder construction)という特徴もある。

こうした自由闊達なコミュニケーションが個人の資格で可能な世界にあって、どんな情報をどのようなスタイルで作りあげるか、どのHome pageに

リンクを張るか(張りたくなる衝動をどうコントロールするか)といった、広義の編集行為を支えるリテラシーとはどんなものなのだろうか。当日は、Home page作成者に実施中の調査結果を中心に報告する予定である。

つくる：画面を構成することは理解を支援する

山本博樹(大阪学院大学)

生活の情報化が進展する中で、だれもが気軽に情報メディアを使用できるようになり、「表現者」になれる環境が整いだしてきた。このこと自体は喜ばしいが、同時に、「分かりにくい」表現も多くなってきており、情報メディアを用いて情報をデザインし表現する力、いわゆる「作るリテラシー」が求められる所以である。

映像表現を例に取り上げてみる。教師や保母が家庭用ビデオカメラを駆使して、生活指導や体験学習のための教材を自作したり、学内行事や園生活の記録をする機会が増えていると聞く。しかし、年少の子どもは、メディアの特性や社会的事象についての知識量が相対的に少ないため、「大人の視点」で「作られた」映像表現を理解できない状況が生じる。このため、受け手の視点に立って表現を「作るリテラシー」のための教育が必要になる。

さて、映像表現はそもそも「作られた」ものであり、ショットの連続によって組み立てられたものである。この「組み立て」は画面構成と呼ばれ、この基礎にはカット技法がある。今回の発表では、カット技法の認知特性の考察を通じて、画面を構成することがいかに重要な役割を果たすかを示したい。わけても、年少の子どもにおいては、画面構成と理解とがいかに密接な関係にあり、従って、子どもの理解支援にとって、送り手によって画面を「作ること」がいかに重要であるかを確認しておきたい。ここから、「分かりやすい」画面デザインのための実証的な指針が提示されたり、そのための評価システムが確立されることも期待されよう。

ところで、画面を「作ること」は元来過小評価されやすい性質を持つ。これはカット技法が見どころされやすいことから例証される。つまり、巧みに「作られた」デザインは透明性のために、その役割が看過される。しかし、その役割の重要性を再認識するなら、「作ること」の重要性を繰り返し強調せねばならないことになる。